

令和8年2月26日

令和7年度とうきょう すくわくプログラム推進事業 活動報告書

園名	北区立さくらだこども園
所在地	北区王子5-2-6-103

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然

<テーマの設定理由>

本園は自然に恵まれた広い園庭がある。木や草花など周りの自然環境に自分から関わって遊ぶ幼児がいる一方で、自然環境には目が向きにくい幼児もいる。

教師は、幼児に、園歌にある桜やイチヨウの木をはじめ、園内にある様々な木の様子に関心や親しみをもち、大切にす気持ちをもつとともに、自然と関わる中で、自分なりに考えたり、発見したり、試したり、表現したりする面白さを感じてほしいと願っている。また、園庭の木々を通して、果実の収穫への期待をもったり、季節の移り変わりを感じたりできるように考えている。

そこで、身近にある木に親しみ、その様子や変化に気付き、思い巡らせるように機会をつくることとした。

2. 活動スケジュール

4月	活動①「この木！何の木？気になる木」
11月	活動②「イチヨウの葉で遊ぼう」
12月初旬	佐々木洋先生による自然講習
12月	活動③「落ち葉で遊ぼう」

3. 探究活動の実績

活動① 4歳児4月「この木！何の木？気になる木」

<活動の内容>（活動のために準備した素材や道具、環境の設定、意識した教師の関わり）

- ・4月2週目、園庭に面したテラスで園歌を歌った後、教師は、歌詞に出てくる園庭の木に関心をもてるよう、桜とイチヨウの木がどこにあるか聞く。進級児は、「知っている」と園庭の木を指さす。
- ・4月3週目、園庭にて学級で引越しゲームをした際、教師は、「こども園の木にお引越し」と言い、幼児が木に実際に触れる機会をつくる。幼児は、イチヨウの木や桜の木など、園庭の好きな木に触る。翌日、教師は、幼児に好きな木をインタビューする。その後、一緒に足を運ぶことで興味をもって関われるよう、幼児が触った木を3本ほどみんなで見に行く。
- ・4月4週目、幼児から「またみんなで木に触るのやりたい」という声が聞かれたため、再度学級で木に触る引越しゲームをする。その後、教師は、幼児が気付いたことや感じたことを言葉にできるよう、自分の触った木を紹介する時間をつくる。みんなで見に行くと、柿の木を触った幼児は「これは柿の木。ここで遊んでいたから知っていた」と話す。桜の木に触った幼児は「（触ると）ザグザグするよ」と話す。教師は「ザグザグするんだね」と幼児の言葉を繰り返し、幼児なりの表現を丁寧に受け止める。教師が木に触ると、触ってみようとする幼児や近くに見に行く幼児がいる。
- ・数日後、教師は、再度学級で自分の触った木を紹介する時間をつくり、繰り返し話題に挙げることで、幼児が自分から木に興味をもって関わるきっかけとなるようにした。「さくらだこども園だから桜にタッチした」「ロープ橋があって遊べるから、イチヨウの木が好き」「柿の木の隣にも木があったよ」など、前回よりも、幼児から出てくる言葉が増えた。
- ・好きな遊びのときに、幼児が「ぼくは夏みかんの木が好きなんだ」と話す。それを聞いた近くの幼児が「どうして好きなの？夏みかんないのに」と聞くと、「ここの場所が好きだから」と答え、木の根に乗る。周りにいる幼児が「夏になったらできるかな、夏みかんだから」「うわー、大きい木」と、木の上の方を見ながら口々に自分の思ったことを話す。教師は「夏みかんができるのが楽しみだね」と一人一人の言葉を受け止め、一緒に見上げながら共感する。幼児なりの表現を丁寧に受け止め、幼児が伸び伸びと自分の思いを表現したり、気付いたことを意識したりできるようにした。

<活動の様子>



<振り返り>

(振り返りによって得た教師の気付き)

- ・自然（木）と出会う機会をつくることで、興味をもって見るようになり、そこから考えたり、自分から関わったりすることにつながった。
- ・木に関心をもつようになったことで、その後、「夏は木陰が涼しい」「秋になるとイチョウの葉の色が変化する。木によって色の変化のスピードが違う」「冬になるとイチョウの木には葉がなくなる」などと、季節ごとの変化に気付くことにつながった。

活動② 4歳児 11月「イチョウの葉で遊ぼう」

<活動の内容> (活動のために準備した素材や道具、環境の設定、意識した教師の関わり)

- ・11月下旬、イチョウの葉が落ち始めると、多くの幼児が関心を示す。落ちていた葉をよく見たり、ままごとに使ったりする。たくさん落ちている日には、数人の幼児が、手で拾ったり、長いシャベルを使ったりして集める。集めた葉が山のようにになると、上に乗ったり、寝転んだり、葉を両手にかき集め上に向かって撒き散らしたりして遊ぶ。幼児は、イチョウの落ち葉を集めたものを輪ゴムで束ね、花束のようにすると、自分のロッカーに置いておき、毎日園庭に出るときに持って行ったり、ままごとをする傍らに置いておいたりして、大切に使う。1週間以上経つと、「葉っぱがパリパリになった」と葉の感触が変わったことに気付く。
- ・教師が水を撒いた後の園庭で遊んでいる際、幼児がイチョウの落ち葉の上にある水を見付けると、教師に「見てー！ ぷるぷるなの」と言う。教師は「本当だね」と言い、幼児と一緒にイチョウの葉を見る。教師が、風や振動によって水が動いたときに「ねえ、動いたよ」と言って驚くと、幼児はその水をじっと見た後、水の下の方のイチョウの葉を左右に動かしてみる。上の水が揺れると、面白さを感じ、繰り返しイチョウの葉を左右に動かす。水が動く様子を見た幼児は「これもキラキラしてる」とうれしそうに言う。教師は、「キラキラしているね」と幼児の思いや気付きを丁寧に受け止める。

<活動の様子>



<振り返り>

(振り返りによって得た教師の気付き)

- ・教師が幼児と同じ目線で、発見の喜びや驚きに共感したり、気付きを発信したりすることで、幼児がどんなことも発見であると感じられ、新たな好奇心や、発見への意欲をもつことにつながった。
- ・幼児の、感じたことや気付いたことを自分なりの言葉や表現で表す姿をありのまま受け止めることが、幼児が自分なりの言葉で安心して思いを表すことにつながった。

活動③ 4歳児12月「落ち葉で遊ぼう」

<活動の内容> (活動のために準備した素材や道具、環境の設定、意識した教師の関わり)

- ・12月中旬、園庭に落ち葉が増えると、拾ってよく見たり、集めたりして遊ぶ。教師は、拾った落ち葉を入れられるように、ザルやカップ、バケツ等を幼児が手に取りやすいところに出しておく。教師は、幼児と一緒に砂場でままごとをする中で、「いちごを取ってきます」と言い、赤い葉を集めて砂場に戻り、ちぎって砂で作った料理に掛け、落ち葉を遊びに取り入れられることを示す。教師が「次は何にしようかな」とつぶやくと、幼児が「次はメロンにしよう。メロンは黄緑だね」「次はバナナにしよう」などと言って、黄緑色の葉やイチョウの葉を違うザルに集める。近くにいた幼児も加わり、一緒に探し始める。「次はスイカにしよう」「スイカの周りは緑だよ」と幼児同士で話し、緑の葉を集めることになる。緑の葉を数枚集めると、幼児が「うーん、メロンとスイカは似ているね」と言う。教師が「そうだね。スイカの葉っぱはどれだろうね」と言うと、メロンに見立てて集めた葉とスイカに見立てて集めた葉を一枚一枚見比べ、「これはメロン。こっちはスイカ。これは茶色いからメロンでもスイカでもない」と言いながら分ける。
- ・1月初旬、幼児が教師に「先生、また果物の葉っぱ集めよう」と言う。幼児は「バナナにする」と言ってイチョウの葉を集めると、「こうやって小さくしてください」と葉を握って見せる。握ると、イチョウの葉は粉々になる。教師が「前とは違うんだね」と言うと、「前よりパリパリになったからね」と言う。
- ・12月中旬、幼児3人が、イチョウの葉をきなこ、赤茶色の葉をあんこに見立てて、ままごとをする。赤茶色の葉が数枚ついたものを見つけた幼児が、「見て。ここに種がある」と一緒に遊んでいた幼児と教師に言い、赤茶色の葉の根本についた種のようなものを見せる。幼児たちは「あんこの種だ」と言ってカップに種を入れて集め始める。3人で種を見ながら「何だろう」「せみの卵じゃない。佐々木隊長（自然講習の講師）がみかんの木に卵があるって言った」と言う。興味をもった周りの幼児にも種を見せると、一人一人が種を触ったり、よく見たり、においをかいだりする。教師は、集めた種を学級の自然物コーナーに置いていつでも見られるようにし、幼児の興味や関心が続くようにする。降園時、教師は、周りの幼児も葉や種に関心をもてるよう、学級で見つけたものを紹介する時間をつくる。「この種は何だろう」と話題に挙げると、幼児は「幼虫の種」「ヘラクレスオオカブトの種」など思い思いの考えを話す。
- ・翌日、学級に置いてある赤茶色の葉を見て、幼児が「今日はこれを探そう」と手に持ち、同じ葉を探し始める。園庭の様々な落ち葉と見比べながら「これは違うな」「色が緑だから違う」などと言う。数人の幼児が加わり、一緒に探し始める。花壇や栽培物のプランター周りで赤茶色の葉を見付けると「たくさんあった」と言ってザルに集める。他にもサルスベリの実や花が落ちていることにも気付く。園庭の様々なところで葉を探していると「探検隊みたい」と言う。「隊長、ここに大きな葉っぱがありました」「ギザギザの葉っぱがありました」など見つけたものを言葉にする。見つけた葉をみんなで触り、「本当にギザギザだ」「ツンツンしてる」と見たり触ったりして感じたことも話す。教師は、幼児一人一人の気付きや表現を丁寧に受け止める。

<活動の様子>



<振り返り>

(振り返りによって得た教師の気付き)

- ・落ち葉を集めたり、遊んだりする中で、色や形、特徴をよく見て分類する、体感的に変化に気付く、見ているものと聞いたことをつなげて考える、考えたことや気付いたことを言葉にする、などの姿が見られた。
- ・自然講習を通して知ったことが、遊びの中で見立てたり、自分なりに考えたり、不思議に思ったりするきっかけとなっている。
- ・教師との関わりや気の合う幼児同士との関わりの中では特に、自分の気付いたことを言葉にしたり、友達の話を聞いて受け止めたりしやすかった。
- ・4月より、幼児が木に関心をもてるように、体の諸感覚を使って幹や葉に触れたり、落ち葉を使って遊んだりできるようにし、教師が幼児の思いや気付きを丁寧に受け止めてきたことで、季節による木や葉の変化に気付く姿や、気付きを自分なりの言葉で表現したりする姿が増えた。
- ・4歳児では、関心をもって自分から関わると、よく見たり、特徴や違いに気付いたり、発見を面白がったり、見付けたことや気付いたことを自分なりの表現で表したりする姿が多く見られた。このような姿が探究心につながる土台であり、今後自分なりに考え、言葉にすることやもっと知りたいと思うこと、考えたことを試すことにつながると思う。

以上